彙報

京都大学文学部哲学科卒業論文題目

——昭和四十八年三月——

哲学

伊藤邦武　デカルト『方法序説』

古谷善幸　カントのカテゴリーの超越論的演繹について

牧野治郎　純粋理性の誤謬推理について

宗像恵　デカルトの形而上学

伊藤晴夫　ヘーゲル『精神現象学』の意識の展開——絶対的認識の根拠付け——

岩崎万里子　自我と存在——デカルトの方法——

田中誠一　ヴィトゲンシュタインの哲学

岩本晴穂　第四次延長としての意識——サルトルのコギトについて——

寺井俊正　『悲劇の誕生』及び其の時期の遺稿に於けるニーチェの認識論に就いて

岩熊幸男　Proslogionに於ける神の存在論的証明について——intelligere と cogitare を中心として——

西洋哲学史

鎌田康男　カント『純粋理性批判』——純粋悟性概念の超越論的演繹について——

鈴木照男　アリストテレスに於ける感覚と知性

中岡成文　ヘーゲル『精神現象学』について——学への行程としての学——

仲子潔　『省察』に見るデカルトの「疑い」について

山口義久　不死なる魂とイデア

山田賢一　『純粋理性批判』における範疇の超越論的演繹について

大中弥生子　〈共同性〉の抽象過程——ヘーゲルにおける〈家族〉から〈市民社会〉への移行——

勝見勉　パスカルに於ける人間認識について

片見冨士夫　フォイエルバッハ批判

松多勉　自由論について

丸山清明　改革への意志（ニーチェ論）

吉沢潔　ルソーの社会思想と人間概念について

小池澄夫　プラトンの『クラチュロス』の主題について

西村元延　『判断力批判』を読んで

舟橋憲秀　オルテガ——個人的生と世界の構造——

樋口　寛　メルロ＝ポンティの根本思想について
広瀬幸雄　——日本語助詞に関するひとつの考察——社会交換過程における一研究

印度哲学史

八木　徹　ブラフマスートラ・シャンカラバアーシュヤ、第二篇第一章・二章の研究

中国哲学史

成瀬哲生　『荀子』の思想と正名篇の構造について

倫理学

池上哲司　責任と実存——Viktor E. Frankl を手懸りとして——
関　道夫　現代文化に関する一考察
柴田　秀　自由の意味
橋川　渉　H・ベルグソンにおける個の問題
橋詰公也　真理と自己への道——キェルケゴールの『反復』を出発点として——

心理学

佐伯康子　幼児における図形の方向認知
田中千秋　不安の形成と過去経験との関連について
永井英明　社会心理学における一研究
野中譲二　社会心理学における一研究
藤島　寛　白ネズミの選択状況における連続逆転学習——報酬量・報酬のスケジュール、及び過剰訓練に関する一検討——
宮田一雄　社会心理学における一研究
水島基喜　還元視における見えの大きさと見えの距離に関する一実験
沢見やよい　児童の人物画における body-image の発達とその要因
塩坪いく子　判断と推理の発達
高橋順一　言語の心理学的研究

美学美術史学

井尻敏夫　世紀末芸術における女性象徴表現について
上倉庸敬　エチエンヌ・ジルソンの芸術哲学に関する一考察
金春康之　詩と神的なるもの
炭竈健司　ミケランジェロ晩年の三つのピエタ像について
富岡郁子　ポール・ヴァレリ『詩と抽象的思考』
山田良元　想像的意識と映像の存在
遠藤直孝　マッシモ・カンピリについて
金田千秋　中世の美の思想
土生一晴　チューリッヒ・ダダ

室井恭子　Surrealism の意味

社会学

内田隆三　「行為理論」の検討

田中信男　明治維新の社会心理学的考察

高原正興　アノミー論の現代的課題についての一考察
——特に疎外論との関連において——

中須賀淑子　マスコミュニケーションにおける疎外現象の一考察

長井始　ウェーバーにおける近代と官僚制

深沢健二　理解社会学論

溝部明男　ウェーバーにおける〈社会—個人〉観の一特色について

桃井泰道　マックス＝ウェーバーの理念と方法

横尾直樹　技術革新と労働組織

吉野友博　「日本型労使関係」の特質

大西正倫　家族論

加藤明子　PR論（PRの社会的機能）

目黒精一　現代日本の老人問題

宗教学

棚次正和　人間とは何か
——ベルグソン哲学を手引きにして——

松丸寿雄　ハイデガーの『有と時』における世界について
——『有と時』第一編第三章に即して——

松永秀和　精神構造の二重性

坂井田啓子　ヤスパース哲学と終末論との関連について

仏教学

稲葉純子　Kuśa-Jātaka の Sanskrit および Pāli テキストについて

藤本広志　あそびと空

京都大学大学院文学研究科（哲学系）修士課程修了論文題目

——昭和四十八年三月——

哲学

塚本正明　ディルタイにおける歴史的世界の研究
——解明と批判の試み——

印度哲学史

徳永宗雄　ātmaśarīrabhāva の成立に関する諸問題

西洋哲学史

岡崎文明　アウグスティヌスにおける神と魂

岡村信孝　超越論的分析論と有限的認識
今　義博　回心の構造
中川純男　アウグスティヌスにおける人間理解
——『告白』第一巻二章・三章をめぐって——
梅林誠爾　ヘーゲル論理学における判断論
小川隆雄　ソクラテスにおけるアラクシアの問題
田中庸雄　超越論的論理学の問題
——特にカントを顧慮せる——
多田省吾　プラトンの中期著作の一考察
門田克弘　カントの原則論について
芝尾光三　M・ハイデッガーにおける「世界と物」

宗教学

北野裕通　ヤスパースの哲学的信仰について
氷見潔　絶対者の臨現と学
——神の存在証明という観点からするヘーゲル論理学の研究——
芳賀直哉　ティリッヒ神学における救済論の問題
——聖霊論を中心にして——

仏教学

佐々木恵精　四百論に見られる中観学派の実践道
辻村泰彦　初期大乗仏教に於ける菩薩信仰
——普門品にみられる称名信仰と観世音菩薩——
細川寛　清弁の中観思想
三浦久　楞伽経に於ける宗教経験の心理学的考察
白崎顕成　後期仏教論理学派に於ける普遍の問題について
——特に Jitāri を中心として——

基督教学

勝村弘也　ヨナ書にみられる神学的論議について
帆苅猛　アレクサンドリアのクレメンスの倫理思想
村山周治　カントの神観

心理学

芹阪直行　周辺視知覚の研究
——反応時間及び時間閾を中心に——
庄司禎夫　見えの大きさと距離との関係についての一実験
高取憲一郎　短期記憶における organization
谷村覚　二歳児の認知発達
——概念形成の問題を中心として——
中川恵正　白ネズミの弁別学習における逆転・部分逆転学習におよぼす過剰訓練の効果
浜田寿美男　言語研究の枠組
——〈言葉の意味〉への予備考察——
長沢秀雄　系列化操作獲得過程の研究

——手の把握コントロールにおける時間群性化課題の検討——

渡辺恒夫　運動知覚における「みかけの重なり」の諸現象

社会学

井上万里子　現代日本の生産力至上主義によって惹起される社会問題とその研究に際しての方法論——瀬戸内海地域開発の現状と岡山県邑久郡牛窓町西脇における産業を中心とした変動——

高沢淳夫　エミール・デュルケームにおける人間の問題——その教育論の分析を中心に——

中島昌弥　認識社会学の一研究

美学美術史学

稲次保夫　鳥獣戯画甲巻

京都大学大学院文学研究科（哲学系）博士課程単位修得者研究論文要旨題目

——昭和四十八年三月——

哲学

林　隆　二つの「一」についての試論

丸山高司　「歴史の説明」について

西洋哲学史

田中　進　ラッセルの「要請」について

山本耕平　創造とイデア——トマス・アクィナス De Veritate, Q. 2. 3——

和田トク子　アウグスチヌスの思想における神の愛について

宗教学

海老澤善一　ヘーゲル哲学における「学」の概念

山下秀智　キェルケゴールにおけるキリスト像

仏教学

宮本献璽　インド大乗仏教における唯識思想の研究

頼富本宏　インド密教研究序説

肥塚隆　エローラ石窟研究

基督教学

宮庄哲夫　宗教改革におけるルターの社会的関心の展開

社会学

田口宏昭　専門職——エトスと役割緊張——

哲学研究　第五百四十二号

八木秀夫　組織と専門家

美学美術史学

岩城見一　ヘーゲル美学に於ける近代

宮島新一　中世初期における倭絵の諸相

次号目前

視覚の生態……柿崎祐一
——心理学的知覚論への一試考——

《芸術の終焉》と《芸術の可能性》…岩城見一
——ヘーゲル美学の解釈について——

伝達の可能根拠について……小浜善信
——*Confessiones*, XI, 3, 5——

「構造的発展における哲学」
としての体系……舩山信一
——西田哲学とヘーゲル哲学との一対立点——

次号論文予告

随眠と帰属の理論……山内得立

論評と構築とのあひだ……酒井修

物理学と宇宙論における最近の試み…佐藤文隆
——統一ゲージ理論と力の法則の相対化——

カントに於ける最高善の
実践的必然性に関する一試論……北岡武司